

インドは中国のように経済成長するか

本コーナーは本来「中国からの風便り」であるが、春節明けにインドへ1週間ほど出張する機会があったので、今回は番外編としてインドの情報を寄稿させていただこうと思う。

私がインドを訪れたのは、IPBAという環太平洋弁護士協会の年次大会に参加するためである。IPBAは毎年場所を変えて開催されており、今回はインドのデリーで開催された。私もできるだけ毎年参加しているが、今回はインドということもあり、正直参加するかどうか相当悩んだことは事実である。その理由は、大学生のころにバックパッカーとしてインドを旅した際、リキシャーとの運転手の価格交渉でぼられたことや、現地の水を飲んでお腹を壊したことなど、インドでの色々な意味での「しんどさ」がフラッシュバックしたからである。しかし今回、久しぶりにインドに行って良かったと思っている。私がインドで感じたことをフレッシュな記憶のうちにここに書き留めてお伝えしたいと思う。

インドは今後、中国のように経済成長するか？私が感じた個人的な答えは、「経済成長はする、しかし中国ほどのスピード感はないだろう」というものである。

まず私がインドで感じたことは、「人口が多くエネルギーに溢れている」ということである。インドの人口は2025年時点で14.6億人であり、中国の14.1億人を抜いて世界第1位である。他方、インドの面積は中国の3分の1（約329km²）しかなく、人口密度は単純計算で中国の3倍である（約497人/km²）。またインドの年齢の中央値は29歳と若い人が多く、中国の41歳と大きな差がある。

IPBAはデリーの空港近くにあるエアロシティという外資系ホテルが集まるエリアで開催され、このエリアは外国人や一部のインド人セレブがいるだけでそれほどの混雑さは見られなかったが、この整然と作られたエリアを一步出ると、人・人・人、あらゆるところに人が溢れていた。一回の視界に入る人間の数が日本の5倍くらいはいる感覚である。

少し埃っぽい道路には車のクラクションが鳴り響き、その両側に露店のお店が軒を連ねて食べ物や水を売っている。散歩しているとインド人からデリーを案内しようと英語で声を掛けられる。商魂たくましく、要らないと伝えても、日本人か、東京か大阪か、これからどこに行くのだとずっとついてくる。また少し歩くと、バクシーシ（喜捨）を求める子供たちが声をかけてくる。その横ではまだ先ほどのインド人が観光に行かないかと一方的に話かけてくる。

これだけ多くの人々が生きていくために、それぞれ毎日の食い扶持を稼がなければならない。インドのGDPは2025年で約3.8兆ドルと発表されており、日本が抜かれるのではないかというニュースもあった。IMFの推計によるとインドの1人当たりの所得は3000ドル強とされ、日本の約3万6390ドルとまだ大きな開きがあるが、これだけ若い人が多くいるインドには秘められた強いパワーを感じざるを得なかった。これは、私が大学生の時、バックパッカーとして中国を旅行した際に感じたパワーに似たものであった。

他方でインドでは中国と異なる点も多数見受けられた。まずインドにおける人々の格差である。経済的な格差に加えて、インドにはまだカースト制の影響が残って

おり、努力したとしても抜け出すことができない階級・身分があるように感じた。またおおらかな（言い方を変えると少しいい加減な）国民性も生産活動に影響を与えるかもしれない。IPBAのOpening Sessionが、なんと予定されていた時間を30分過ぎても開始されず、ようやく始まったと思ったら20分程度で終了し、当初の予定より早く終わったときには笑いがこみあげてこざるを得なかった。この一事をもって決めつけるのはよくないかもしれないが、比較的勤勉な中国人に比べると、生産における効率や歩留まり率など、インドは中国に及ばないのではないかとと思われる。確かに労働者のコストは中国に比べると安価であることは事実であろうが、それだけで世界の工場となりうるかという疑問を抱かざるを得ない。

インドのIT産業は今後インド経済を牽引することになることは間違いないだろう。しかし、IT産業は一部の企業に莫大な富をもたらすものの、IT産業に関連しない企業や人々が恩恵を受けることが難しい。IT産業を含めた幅広い業界の発展があってはじめて、特に低所得者層の経済力を伸ばすことができ、インドの経済成長がより

期待できるだろうと感じた。

なおせっかくなので少し足を伸ばしてバラナシという町を訪れた。ガンジス川のほとりにあるヒンズー教最大の聖地である。ここではガンジス川の水を赤ん坊の産湯に使いながら、その横では火葬場の遺灰を川に流している。まさに生と死の混在する場所である。ヒンズー教によるとガンジス川で沐浴すれば輪廻転生から解脱できるということであり、インド各地からこの地を訪れる人が後を絶たない。ここで全身沐浴をして体を壊す日本人が多い（私の友人は以前沐浴して赤痢になり日本で隔離された）ことから、私は手をつけただけであったが、インドの人々の信仰に少しだけ触れられた気がした。

以上



具体的な事案に関するお問い合わせ ☒ メールアドレス : info_china@ohebashi.com

本ニュースレターの発行元は弁護士法人大江橋法律事務所です。弁護士法人大江橋法律事務所は、1981年に設立された日本の総合法律事務所です。東京、大阪、名古屋、海外は上海にオフィスを構えており、主に企業法務を中心とした法的サービスを提供しております。本ニュースレターの内容は、一般的な情報提供に止まるものであり、個別具体的なケースに関する法的アドバイスを想定したものではありません。本ニュースレターの内容につきましては、一切の責任を負わないものとさせていただきます。法律・裁判例に関する情報及びその対応等については本ニュースレターのみに依拠されるべきでなく、必要に応じて別途弁護士のアドバイスをお受け頂ければと存じます。